

2010年6月18日(金) 14:00~15:30

日本記者クラブ 10階ホール

## 藤原会長講演録

行政はアートである

～レタスの先にあるもの～

川上村の村づくり・22年間について語る



### ■川上村について

川上村は、長野県の1番東の端の千曲川の源流の村で、秩父多摩国立公園の長野県側の入口になっている。

また、1番低いところでも標高1,100メートル・年間平均8.6～9℃という5月でも薄氷のはる寒い所である。

### “金”で栄えた戦国時代

かつては、山梨県の裏側で、長尾金山などの金脈があり、戦国時代は相当栄えたという歴史がある。そのため、江戸時代は幕府の直轄領であったが、武田信玄が軍資金として、掘り尽くした結果、江戸から明治にかけては、貧しい村だった。

川上村は、標高が高く、水温も10℃前後と低いため、米がとれず、ヒエやアワなどの雑穀を作って、細々と暮らしていた。明治になってからは、1年のうち8ヶ月を男性は諏訪の寒天工場、女性は岡谷の製糸工場へと出稼ぎに行っていたため、「出稼ぎの村」と言われてきた。

### “カラ松”もダメ

川上村は、信州カラ松の原産地であり、質の良いカラ松の原生林があった。明治から大正にかけては、カラ松を用材として供給し、一時はこのカラ松で食べられるようになった。しかし、材木は1度切ってしまうと100年のスパンが必要になる。村民の努力の結果、明治22年から明治25、6年頃、カラ松の人工育苗に成功した。この成功で、再造林が可能となり、朝鮮半島・中国・ヨーロッパのほうに輸出出来るようになった。今は、北朝鮮にはほとんどないが、韓国・ソウルの北のほうの広葉樹木園という国立公園の中に、信州カラ松を用いた森林博物館が残っている。また、ドイツからオーストリアに行く途中の山々に多少「川上のカラ松」が残っている。

この「カラ松」も戦後の緑化運動で、売り尽くしてしまいカラ松産業もダメになった。

## 限界からの選択 “レタス”

村はどうやって食べていいか、馬鈴薯や花など試して相当模索したが、良い基幹産業がみつからなかった。白菜・大根など一部作られた野菜も、今のようにしっかりした保冷システムが無かったため、大阪に持っていくまでに腐ってしまい、上手くいかなかった。

ところが、昭和 25 年に朝鮮戦争が勃発し、米軍は、朝鮮半島に何万人もの兵隊を送り込むことになった。当時、野菜の輸送が出来ず、兵士が野菜不足ならないためには、朝鮮半島に 1 番近い日本で調達する必要がある。秋から冬にかけての野菜は、九州・四国で調達できたが、夏はどこも暑過ぎて、野菜が出来ず、特に葉菜類は全く調達出来なかった。米軍のバイヤーが日本中探し歩き、朝鮮半島に近く、標高も高い川上村で、レタスを試作したところ、良く出来た。当時の地元の人は、苦みもあり、ただ作るだけで、ほとんど口にすることがなかったが、米軍特需で、戦争が終わるまで川上村からほとんどの“レタス”を持って行った。

戦後は、日本の国内経済や生活需要が変化し、野菜ビタミン、動物タンパクが毎年 10% の伸び率で、国内需要が伸びていった時代であった。戦争が終わり、たまたま国内需要が伸びた時代に、「川上村のレタス」が時流に乗った。川上村には、レタスしか無く、本当に限界の中から選択された高原野菜なのである。

このように農業では、最悪の立地を逆に利用して、高原野菜の一大産地ということで、川上村は起き上がってきた。

1つの産業を起さるにはチャンスもあるが、大事なことは3つある。

### 1つは、「時流にのる」こと

→川上村は、時の流れにのったということ。

### 1つは、「土地資源」

→農業には土地資源がなくてはならないが、川上村には豊富な土地資源があった。

川上村は、明治 22 年の町村合併で、8 つの村が 1 つになった。その 8 つの村が全部新しい村に土地を抛出し、1/3 は村に残し、1/3 を個人、1/3 を共有地として、三分割してあった。1/3 の個人の用地と 1/3 の共有地を切り開き、当時は 700 町歩から 800 町歩しかなかった畑が、今は 1800 町歩から 1900 町歩ある。明治の町村制になる時の土地政策が、今になって非常に良かったと言える。川上村には、知恵のある人がいたとつくづく思っている。また、川上村は、小作人・地主の関係がなく、平均面積で 1 戸当たり 2.3 畝所有しており、農家・農協・村が、1 つの目標に向かって、今日まで汗を流してきた。非常に均衡がとれており、落ちこぼれがなく、今日まで発展してきている。

川上村は、昨年は少し落ちたが、今は約 600 戸の農家で、合計 135 億円位、平均 2, 200 万円を売っている。これは売り上げであるため、効率の良し悪しで、経費を控除すると原価率 33%~60・70%と経営農家により差はあるが、平均して 8 桁農業が出来ているという珍しい地域である。

### 1つは、「人」

→川上村でも、戦後は復員した人口の多かった時代であった。

現在は、他の地域では、後継者問題で困っているところもあるが、川上村では専業農家の全戸に後継者がいる。問題といえば、嫁さんである。周辺の地域よりは良いほうであろうが、今までは 7 割は村外から嫁さんがきており、新しい血が入ってきている。後継者も 7 割が短大以上、嫁さんも相当高等教育を受けてきており、村民活力が高いのが自慢である。

川上村では、この「時流」「資源」「人」の 3 つが揃って、産業が定着した。

## ■所得は有限、欲望は無限

農業生産に特化してやってきたことで、確かに収入が増え、1 軒で、3,000 万円から 3,500 万円の収入が得られ、多い家では 1 億円に近い農家所得を得るまでになった。しかし、モノからみた幸福度は、今年以上、隣以上の収入が欲しいという打算が多くなっていく。方程式にすれば、幸福度＝欲望／所得で、所得は有限で、欲望は無限であるから、経済成長に伴い、精神環境が悪くなるのをこの目で見てきた。経済追求の地域社会になっていくと大変なことになる。つまり、野菜は、相場産業であり、悪い時には“野菜を捨てるために作る”年もある。悪い時にしっかりフォローする必要性和そういう時にしっかりすることが、真の活力ある地域である。そこで平成の中頃から、教育文化や福祉へと政策転換をして、相当力を入れてきた。

## 衣食住プラス“情”と“3こう”の政策

衣食住は、個人の努力で相当向上させることが出来るが、公共が絡まなければ、全体のレベルを上げることが出来ないものがある。分析した結果、政策の 1 つとして、衣食住プラス“情”「情報」と「高齢化対策」「交流」「交通」の“3こう”というテーマを作り、行政を集中した。

### ◇まずは交通 ～スクールバスを共有化～

どこの地域も過疎バスについては、問題になっているが、川上村も民間バス会社がやっていたバスが、とうとう乗車人数 5 人以下となり、不採算路線で廃線ということになった。

しかし、「バスには乗らなくても、バスまでも無くなれば、心理的に過疎に拍車がかかってしまう。バスには、バスが通ったから『休みにしよう』『昼にしよう』などの役目がある」という村民の声があり、バスには“乗る”という実用性と“ある”という存在性という両面の意味があるということが分かった。

どうせなら、喜ばれる赤字を作ったらどうかということで、プロジェクトを作り、分析した結果、民間バスにも行政にもずいぶん無駄があることが分かった。民間バスは、労組が活発で、バスの時刻が職員の都合で組まれ、JR や利用する人に連動した運行がなされていない。また、村のスクールバスや福祉バスは縦割りで、調整の必要があった。

川上村は、本来の消極策に反し、民間バスに対しては、ダイヤや停留所を増やし、バスの中で定期券を売るという積極策を打ち出した。さらに、村には1日たった1時間のために、大型バスが2台あり、昼間は、高価な大型バスも運転手2名も遊んでいたため、「スクールバスの住民利用」を文科省に申請した。ところが、文科省からは、「教育上の問題」と「住民からはお金をとり、子どもたちは無料という二重構造」がけしからんということで許可が得られなかった。それでも「どうしても地方路線を守るには、これしかない」という信念で、何度も夜討ち朝駆けをやった。

ある日教育長の時間が空くまで待っていた、長野県庁1階の公文図書館（当時は24時間開いていた）で、おそらく誰も気付かないであろう教育六法の中の文科省の教育事業に関するページ中に、「スクールバスの利用は、大臣の許可があれば、その限りでない」という1行を見つけ出すことができた。早速、文科省に行ったものの「事例がない」と一蹴された。執念で文科省の向かい側にある「政府刊行物センター」で、文科省の職員録を買い、義務教育の助成課長の自宅宛に私文書で、何十ページにもわたり、切々と訴えた。読んだかどうかは分からないが、数日後やっと日本で初めて、「スクールバスの住民利用」が許可になった。

そのおかげで、1日何万円、年間1千万円もの赤字が黒字転換になってしまった。スクールバスは1日1往復のため、部活をやるとスクールバスで帰れず、親の迎えが必要だった。今度は無料でどのバスにも乗れ、部活が十分に出来るようになった。また、住民は有料でどのバスにも乗車することができるようになり、完全に複合経営が出来た訳である。今は、また赤字になっているが、数千万の積み立てが出来て、今も持っている。

本当にちょっとした工夫で、赤字から黒字になることが、相当行政の中にはある。ところが、規制があって出来ない。私には「行政に出来ないのは、犯罪だけである」という強い思いがある。

#### ◇次に情報～全村に24時間ケーブルテレビを導入～

昭和61年は、都市情報が主流で、まだ全く農村情報のない時代であったが、しっかりし

たコミュニティを作るには、完璧な農村情報が必要であり、山村振興事業で、農林省に名乗りを上げ、CATV（村営）の導入にチャレンジした。川上村は、100億以上の野菜の産地であるから、農村情報には、時事情報、地域の気象情報のみならず、その日の出荷情報がその日に分かる情報にしたかった。そのため、全村加入の村営テレビを考えた。当時は、民間加入が主流だったため、いくつかの難問をクリアする必要があった。

まず1番困ったことは、郵政省の電波管理局で、川上村の登記簿謄本と印鑑証明を求められたことである。村は、地方自治法でしっかり位置づけられており、しかもそれを発行する場である。「自分の村の印鑑証明や登記簿謄本をどういう方法でとれば良いのか」と係官に尋ねても回答もなかった。それでも色々調整し、完成をした。

川上村の最大のカルチャーショックは、CATVの開局である。出演やコーディネーターが出来るだけでなく、市況速報や村内11カ所の24時間気象情報まで分かるわけである。ところが、こういう難しい施策を全部の村民の理解を得るのは相当難しく、まずは、腹をくくって、やって見せて成功させるしかない。失敗すれば、政治生命はそこで終わることを覚悟しなければならない。成功したから良かったものの失敗すれば、本当に終わりだった。まさに今日16時から、今日売ったものの品目別、等級別、行先別、すべてのデータがブラウン管に出てくるのだから、それを見た時の村民は非常に感動していた。このおかげで村と村民の信頼関係が築けたと言っても過言ではない。

それだけでなく、開局と同時に議会を生中継した。ブラウン管を通して、村民が政治に参加する意識が高まり、議員も村民に向かって、答弁をするようになったことで、議会の権威が高まり、質が高まった。また、村長の答弁がおかしければ、すぐに電話がかかってくるし、くだらない質問する議員に対しても、すぐに抗議の電話がかかってくるなど、緊張感をもって議会を進めることが出来るようになった。情報というのは、使い方によっては、地域振興に大きな役割を果たし、村民との乖離を無くしていくものである。

さらに技術が進み、自宅の電話機から、運動会や音楽会などのリクエストが出来るようになった。今では、村営テレビがないと1日も暮らすことが出来ない状況である。

#### ◇それから交流～国際交流で新種のレタスが誕生～

川上村は四方が山に囲まれた僻地で、他の地域との交流が乏しく、引っ込み思案で、閉鎖的などころがあった。村境越え、県境越え、国境越えを目指し、色々取り組んできた。今は、町田市、武蔵野市、三鷹市、蕨市の4つの市民休暇村がある。本来ならば、会社の保険休養地として寮をつくってもらえば、固定資産税が入るが、自治体との交流なので、固定資産税は入らない。しかし、この都市との交流により、子どもたちが行ったり来たりして、20年来の親子2代・3代にわたり、上手な交流が出来ている。

外国とは、米国のレタスの世界的産地であるカリフォルニア州のサリナスへ後継者を毎

年派遣しており、ワトソンビル市と姉妹都市を結ぶことが出来た。これもすでに 20 年来の交流になる。その交流の中からカリフォルニア大学農学部で、川上村独特のミネラルやカリウムの豊富な村の野菜を作りだした。そのうちの 1 つはロメインレタスで、マクドナルドとかで、ハンバーガーの間に挟むレタスに使われている。今年は、特に 20 周年記念ということで、お互いにカプセルを埋めようとしている。

国際交流の付加価値として新種が出来ると夢のある交流が出来たのも小さな村だからである。特に国が関与すると「種」の関係は難しいところがあるが、小さな村だからこそ、カリフォルニア大学も野菜試験場ものってきた。この 3 社が合弁で、新種のリバーグリーンとサワーアップが誕生した。リバーは川で、サワーアップのアップは上（うえ）なので、合わせて川上（かわかみ）ということで農水省へ届けている。

さらに川上村は、毎年アメリカから村の職員として、英語の先生を呼んで、教師としての役割だけでなく、親善大使として幼稚園から小学校、中学校、社会教育の場まで、参加してもらっている。

## ☆3 つ目の“こう”高齡化対策

### ～川上村に合った高齡化対策、生きがいサービス～

一戦を退いたけれどもまだ元気なサービス予備軍の方たちに、補助金に頼らず、村独自で“生きがいサービス”をケアしている。その人たちがサービスの人たちをケアし、同じ老人世代間で見たり、見られたりというシステムを作り出し、なおかつそこに若い人が入って、実働的にケアをしている。親が子を見るだけでなく、子が親を見たり、子が他人の親を見るという“人間にしかない感性”を使い、お互いを支えていくことで、地域の高齡化対策が違ってくると思っている。川上村は非常に上手く行っている。

## 加えて、3 風（ふう）のふるさとづくり ◇風土 ◇風味 ◇風習

風土で風味を作り出し、風習でしっかりした伝統・文化がある。それが今は、だんだん崩れてきている。この 3 風をしっかりしていかなければ、日本中一律同じ村になって、地域性が全くなくなってしまう。この 3 風をしっかりやるのが、私のふるさとづくりであり、いつもそのための政策づくりを考えている。

## そして何と言っても“人づくり”

川上村に視察に来るとどの人も、高額所得の産業があるから、後継者が定着して、しっかりとした高齡者対策が出来ると言うが、それは全く逆で、人がいたから、レタス産業が起こせた。“人”というのはレタスづくりの前の段階である。

川上村は、竹下総理のふるさと創生で、1 億円を配った時に、「ふるさと村塾<sup>そんじゆく</sup>」を始めた。

もう百数十回続いている。一流の講師を招き、一流の文化に触れたり、ミニふるさと村塾として、東京で能や歌舞伎を見たりしている。

#### ◇学校教育の教は、郷土の郷～川上村では学校郷育～

川上村の郷育は、地域の文化や人材や歴史をしっかりと使いこなせる人材を育てることがふるさと教育である。新しく赴任してきた先生方には、血液の入替により、良い伝統・文化が崩れることのないよう、学校教育の中で、相当ふるさと郷育を入れてもらっている。どうも今の子どもたちは、教育と学習、知恵と知識、文化と文明の区別がしっかり出来ていないように思われる。行政もそうだが、活況と活性化という言葉が混乱している。活況を呈しても活性化にならない地域政策が相当ある。地域に根ざした学校郷育が必要である。

#### ◇画期的な文化センターの建設

そういうことを踏まえて、川上村に、十数年前に画期的な文化センターを作った。当時は農業改善事業であったが、「人口の減ってくる寒村にそんなものを作ってどうする」ということも言われた。

#### －17:15 から ID カードで入館できる 24 時間の無人図書館－

文化センターの中に 24 時間図書館を作り、CD・ビデオ・文庫本を揃えた。24 時間無人に対する「無人の図書館では本が盗まれてしまう」「たばこを吸って、火事になったらどうする」という議会の声に、「是非、村民を信じて欲しい。本を盗むまで勉強するなら、それは盗難の文化であって、盗むくらい本を読んでもらえるならば毎日本を買い足せば良い」という答弁をした。今まで 1 度も盗まれたことも火事を出したこともない。神聖な場所として、今も利用されている。田舎は活字に疎い地域である。この 24 時間という図書館を作ったおかげで、長野県の公立図書館の中では、1 人当たりの読書数が長野県下 4 番目か 5 番目になっている。

川上村のレタス農家は、1 年のうち 6 ヶ月仕事をすれば良く、残りの 6 ヶ月は暇である。都会から来た嫁さんは、冬の空白の 6 ヶ月を持って余していた。その時間をどうやって過ごすかが大事で、そのために文化センターにハイビジョンシアターを設置し、24 時間図書館や農民レストランを作ってきた。これらが非常に上手く機能している。

#### 定住の条件は…

---

都会から見た山村というのは、自然があって、景色が良く、空気や水が美味しいということかもしれない。しかし、どれも一過性のもので、定住するということとは違う。定住の絶対条件は、福祉・教育・文化面がしっかりしているということである。

#### ◇だから川上村は下水道 100%完備

長野県はまだ 80 数パーセント

#### ◇もう 1 つ最近効果が上がっているのは 24 時間ケアできる訪問看護ステーション

病院が遠いこともあるが、「村民が、村民を見る」ことが基本だと考え、病院に委託せず、不採算を承知で 24 時間訪問看護ステーションを作った。それが非常に喜ばれている。特にガンのターミナルケアは完璧にやっている。結果、在宅死は、50%近い数字が出ている。どうしても終末期ということになると病院に入院ということになるが、川上村では、残り 1 ヶ月ということになると、診療所と訪問看護センターの 3 者協議で、病院から連れてきて、医者<sup>の</sup>指示で看護師が 24 時間いつでも訪問できる体制でやっている。高い医学よりも、畳の上で家族に看取られて、他界するシステムを作り出すことが、我々の任務であると思っている。これが 1 番喜ばれている行政サービスである。長野県の佐久病院のモデル地域にもなっている。

こういうものがしっかりしてこそ、嫁さんや定着率に繋がっていく。川上村の生産活力はお金を取れるからなのではなく、その前段のお金を取るためにはどうするかという活力にある。教育・文化・福祉が整備されることで、継続的な生産活力が生まれてくる。

#### ◇たった 4000 人の川上村から昨年世界の宇宙飛行士が誕生

油井 亀美也君が、平成 23 年にソ連の宇宙船に乗るため、今、NASA で訓練中である。川上村は、スピードスケートでも、国体選手も毎年、1 村で 20 人以上輩出している。

### 林業の停滞に対して

カラ松はそのままでは使えないが、耐久力があり、加工すればすばらしい材木である。最近、川上村でも住民が秋田杉・吉野杉などを使用して家の建て替えをするようになった。私は、他の地域のものに付加価値を付けることには抵抗があり、村民にカラ松を使うことを提案したが、なかなか理解が得られなかった。そこで、ここ 20 年間、公共施設はすべて地元のカラ松を使って建ててきた。ちょうど 2~3 年前に建築基準法の一部改正があり、中学校の改築にカラ松を使った。川上村には、まだ木を植えた 70 歳から 80 歳のお祖父さんがいて、育てた中年世代の息子と使う孫との親子三代で力を合わせ、伐採~製材~建前まで、立ち会ってもらい改築をした。あらゆるところで、感動的な場面を作り出し、改築に取り組んだ。子どもたちの使う机や椅子もカラ松を使い、湾曲を上手く使ったりして、80%以上が村のカラ松で出来ており、長野県では、大きい木造建築となった。

#### ◇全国初！村民共有の体育館と音楽堂

学校を子どもたちだけでなく、どうしても村民に使って欲しかった。文科省では許可さ

れず、体育館と音楽堂は、国土交通省の「まちづくり交付金」を使い別事業として建てた。

体育館は村民体育館として、昼間は学校に貸し出し、音楽室は音楽堂にして、村民がコーラスに使い、昼間学校に貸し出すこととした。これは全国で初めてだと思う。音楽堂は、将来、卒業生が、結婚式を出来るように、ドイツからパイプオルガンを買ってきた。晴れの日には、アウトドアで、中庭で、雨の日には、ランチルームで、結婚披露宴が出来るような仕様になっている。体育館も音楽室も別の発想で作っており、今、ほうぼうから視察が来ている。

私は1つの仕事をするのに、文科省とか1つの省庁に固執することがないほうが良いと思っている。計画したら、どんどん省庁から協力してきて、結果的には7つの補助事業が集まり、1つの学校が出来てしまった。木材を使っているから、国産材事業として林野庁が、県は県産材事業で、机と椅子に補助金をくれた。ソーラーは、本来なら電気に変え電熱で暖房をとるところをいきなりソーラーで空気を暖めて床暖房にしたら、非常に効率が良く、そういう技術に対しても、ほうぼう補助金や交付金が出て、**結局二十数億円の事業がたった三億数千万円の自己財源で出来てしまった**。学校を作ることが、相当財政圧迫で窮屈になると思ったら、逆に学校を作って、財政力が良くなったという結果が出た。

したがって、今の制度でも工夫すれば色々なことが出来るということが分かった。ただ、乗り越えるためには、相当の知恵が必要であり、そのためには、規制緩和や地域主権というのは、やってもらわなければならない。もうこれからは国の一環指導で、国のメニューでということは、時代遅れである。地域は地域でしっかりメニューをつくり、**地域の3風の原則**に合った政策を展開し、941ある自治体が941のメニューで、地域色を出していくべきである。**国が地方の潜在力を信じ、認めなければ、今後の国と地方の関係は上手くいかないだろう。**

## 行政はアートである

---

逆境は一見非常に不利に思われるが、逆境は順境に作り替えやすいし、人を逞しくする。挑戦力やハングリー精神を作っていくと信じている。今回は全国町村会長というとなんでもない仕事を引き受けてしまったが、自分の能力は自分が1番良く知っている。人の能力以上の仕事をする時は、人の能力をいただく能力があれば、どんなことでも出来る。東京にも川上村応援団がいて、そういう人たちの知恵が大きく貢献している。

地方自治というのは、本当に苦しくて、夕方帰る時は、非常に悲観的になる。それでも朝になると希望的観測を持ち、今日は何が出来るかという気持ちで通っている。「どうしてそんな苦勞をするのか」と時々聞かれることもあるが、「**人の税金で、自分のロマンが追求出来る。そのロマンが村民と共通すれば良いじゃないか**」という気持ちで、毎日ムチを打ちながらやっている。自治というのは、権力でも権威でもなく、まさに、村づくりのアー

トである。私は、毎日、村づくりのアーティストのつもりで楽しみながら仕事をしている。しかし、そうはいつでも大変厳しい現実が目の前にある。これからも市町村や住民としっかり連携をとりながら、日本の中の小さな村であっても、国のためにしっかり仕事をしていきたいと思っている。

(文責・写真：広報部)

日本記者クラブ

<http://www.youtube.com/user/jnpc#p/u/0/KGxR6EjRZxU>

講演後の質疑応答は、ユーチューブで動画視聴可能です。